

ニューアイルランド島・マランガン彫像から読み解く「収集の歴史」

—慶應義塾大学所蔵資料を出発点にして—

臺 浩亮（慶應義塾大学大学院 文学研究科）

1.はじめに

慶應義塾大学（以下、慶應大）は、植民地期に南洋で収集された民族資料を多く所蔵する。それらは南洋興発株式会社社長であった松江春次の旧蔵であり、主にニューギニア（New Guinea）島とその周辺の島嶼部より収集された資料と伝えられる。現地収集者の一人に小嶺磯吉の名前が挙げられる¹。小嶺磯吉（1866～1935）は肥前島原堂崎村出身で、早くも1890年にトーレス（Torres）海峡木曜島に渡り、貝ボタンの素材として珍重されていた真珠母貝採取業に従事していたが、20世紀に入ると活動の拠点を独領ニューギニアに移し、日本人移民を積極的に誘致しながらココヤシ農園や造船業を中心に商売を拡大した人物である（Iwamoto 1999）。小嶺は事業展開の傍ら、造形物の収集を行った。現在、コレクションの大半はシカゴのフィールド博物館と慶應大に所蔵されており、その数は5000点近くになると推定できる（Welsch 1998; 南の會同人 1937,1940）。

コレクションには、マランガン（malangan）儀礼にかかわる造形物が含まれている。マランガンとは、ニューギニア島東海岸沖合に広がるビスマルク（Bismarck）群島のニューアイルランド（New Ireland）島北中部およびターバル（Tabar）諸島で行われてきた葬送儀礼である。1882～1909年にニューブリテン島ガゼル半島でココヤシやタバコの農園を営みながら、民族資料の収集と調査を精力的に行ったりチャード・パーキンソン（R. Parkinson）によれば、マランガン儀礼は毎年5月末から7月初旬にかけて開催され、複数の故人を親族らが吊い、村人たちが見守る前で嘆き悲しむ機会であった（Parkinson 1999: 276-282）。1ヶ月以上にわたって繰り返される一連の儀式の中で、頭から被る仮面（*tatanua*）、両耳や鼻が強調された仮面（*kepong*）、両耳を強調した大型の仮面（*matua*）の3種を使った舞踏が披露された。これらの仮面とともに彫像（*totok*）や、場所によっては飾り板（*turu*）が、いずれも数か月かけて秘密裏に制作された。本稿で取り上げるマランガン彫像は、*totok*に分類される造形物である。

これらマランガン儀礼にかかわる造形物は、独領ニューギニア期からオーストラリア委任統治領期にかけて大量に収集されており、慶應大が所蔵する2体の彫像もその流れの中に位置づけられる。しかし小嶺資料の大部分は収集地域を含めた情報が欠落しているため、現地収集者に関する議論の中心に据えられることはほとんどなかった²。そこで本稿では、

¹ 松江旧蔵資料は、松江春次本人や南洋興発社員による収集資料と小嶺磯吉のコレクションとに大別される。松江や南洋興発社員は、1933年7月に蘭領ニューギニアで収集活動を行った。また小嶺の収集は不明確な部分が多分にあるものの、独領・英領ニューギニアにおいて行われたと伝えられる（南の會同人 1937:4）。

² 松本信廣氏を中心に小嶺収集資料の集成が戦前に行われ、そこには「残念なことに小嶺氏蒐集品の大部分が由来地を明記せず、之を一々推定するより外方法がなかつた」（南の會同人 1937:4）と記されている。

慶應大のマランガン彫像について、その形態を詳細に観察したうえで、図録やデジタル画像でこれまでに確認しえた資料と比較し、類例にともなう情報から小嶺の収集活動について推定を試みることにする。

2. マランガン造形物の民族誌

マランガン造形物は儀礼においてどのように役割を担っていたのか。民族誌的情報は、独領ニューギニア期の状況を伝えるパーキンソンやクレーマー (Krämer 1925)³、オーストラリア委任統治領期のパウダーメーカー (Powdermaker 1933)⁴やグローブス (Groves 1933)⁵、第二次大戦後のオーストラリア信託統治領期から独立以降のローマス (Lomas 1979)⁶やキュヒラー (Küchler 1992, 2002)⁷の調査から得られる。これらの報告書が記載された時期が以下に示すように大きく3時期に分かれることを意識しながらマランガン造形物の概要を記す。

すでに触れたように、故人の死後数ヶ月から数年後に行われる葬送儀礼で、複数の故人を対象に開催される点は時期を超えて共通する。また、儀礼では舞踏に加えて、専門の彫刻師の手による造形物の展示が行われる。彫刻師は、母系集団のトーテムに関する神話を依頼者から伝え聞くことでそれを造形物に刻み込む。造形物は儀礼後に破棄される。その方法は燃やされるか、森や洞窟などに打ち捨てられ、朽ちるままにされる。

独領ニューギニア期(1884～1914)には造形物の制作は囲いの中で行われ、女性や子供の目に触れぬよう秘密裏に行われていた。完成した彫像は特別に用意された小屋に展示され、許された者しか見ることができなかった。博物館や美術館に所蔵されているマランガン儀礼の造形物には、主にキョウチクトウ科の軽軟材が用いられている。動物や人間の身体部位と支柱が複雑に組み合わさり、彩色には赤、白、黒、黄の顔料が用いられている。また、仮面や彫像には貝製の眼球が嵌入されている。しかし、造形物のそれぞれの意匠やその組み合わせが何を意味し、何を表現していたのかについては、独領ニューギニア期には秘匿性が強かったために民族誌的情報がきわめて少ない(Krämer 1925)。

オーストラリア委任統治領期(1920～42)に入ってもしくは、女性や子供が造形物を目にすることが禁じられていたが、キリスト教の布教が進むにしたがって、その禁忌が徐々に廃れていき、造形物にかかわる民族的情報も増加する。たとえば、少なくともこの時期

³ クレーマーは1907-1909年の期間にニューアイルランド島中部のラマソン(Lamasong)村落を拠点に、レト(Lelet)丘陵やハンバ(Hamba)村落での調査を行った。特にクレーマーの関心はマランガンやウリ(uli)儀礼などの葬送儀礼に関する情報の記録と、造形物を収集することにあつた(Krämer 1925)。

⁴ パウダーメーカーは1929-1930年の期間にニューアイルランド島北東海岸のレス(Lesu)村落を拠点に調査を行った。特にパウダーメーカーの関心はマランガン儀礼を通じた社会・経済関係の構築にあつた(Powdermaker 1933)。

⁵ グローブスは1933-1934年の期間にニューアイルランド島北東海岸のフィソア(Fisoa)村落とターバル諸島のタウ(Tatau)村落を拠点に調査を行った。特にグローブスの関心は西洋式教育・キリスト教布教による現地島民の教化にあつた(Groves 1933)。

⁶ ローマスは1967年、1968-1969年、1974年の期間にニューアイルランド島北端部のティガク(Tigak)地域を拠点に調査を行った。特にグローブスの関心は土地の管理・継承におけるマランガン儀礼の役割にあつた(Lomas 1979)。

⁷ キュヒラーは1980年代にニューアイルランド島北部のカラ(Kara)地域を拠点に調査を行った。特にキュヒラーの関心は造形物の形態と文化の伝達の間で生じる社会・文化の再生産にあつた(Küchler 2002)。

までには、造形物の制作権は母系継承が一般的であること、クランの男性年長者がその権利を有し、その他の成員は部分的な権利者とみなされていることが記されるようになる。この制作権には特定の意匠や彩色を造形物に施すことができる権利と、造形物に纏わる儀礼を行う権利が含まれる。制作権は他のクランの成員に権利を売り渡すこともできた。制作権を売り渡すことによって、売却主はもちろんのこと、そのクランの成員全員が造形物の制作権を完全に失う。そのため、クランの年長者が自身のクランに属する他の成員に貝貨を支払い、その損失を補わなければならなかった。これらの情報にもとづいて、マランガン儀礼がクランを超える広域の社会関係を生み出す機会にもなっていることが、この時期に指摘されるようになった(Powdermaker 1933, Kuchler 1992, 2002)。

第2次世界大戦以降、オーストラリア信託統治領期(1945～1975)に入ると儀礼そのものが廃れてきていたが、それでも儀礼が継続していた地域では、先述の儀礼における社会関係の構築には土地利用の権利や政治的権威の継承が伴うと報告されるようになった。そのなかでマランガン彫像の制作は、「皮膚(tak)」(Kuchler 1992:96; Kuchler 2002:112-3)を作ることによって喩えられる。人は皮膚を重ねて成長する。故人の資質や系譜関係を通して獲得した権利や権威がその時々々の皮膚に刻まれる。彫像を構成する複雑な意匠の組合せは、故人が獲得してきた権利や権威の証であり、古いものから新しいものまで幾重にも重なる皮膚を透き通って表面に浮き上がってきた意匠として説明される。「葬送儀礼は、故人に帰属していた諸権利が貝貨と引き換えに再分配される場であり、縁故者らは彫像の外観を儀礼の短いあいだに心象として記憶することで、継承の正当性を主張できるようになる」と山口は言う(山口 2015: 405)。

「皮膚」の概念が独領期にまで遡るか確証はない。しかし、マランガン造形物を構成する形態特徴や意匠が以前から継承の対象であったならば、マランガン彫像の収集場所と収集時期の時空間分布上で、類似する形態特徴や意匠がある程度かたまると想定できる。そのことを念頭に置きながら、慶應大所蔵のマランガン彫像の諸特徴をまずは概観し、その後に各彫像の類例を紹介することにする。

3. 慶應大所蔵のマランガン造形物

慶應大資料には、少なくとも計5点のマランガン造形物が含まれる。そのうち、彫像タイプの資料は2点(図1、図3)であり、いずれも最下部が杭状に加工されていることから、地面に刺し立てる展示を意図した彫像と考えてよい。各彫像の形態的特徴は以下のとおりである。

3.1. 資料1 (ME-1521) の形態的特徴

【加工・彩色】図1の資料1では彫像の表面に、制作の際の手斧や鑿の削痕がほとんど確認できない。何らかの道具によって表面が磨かれたのちに細部が加工され、彩色がほどこされたと考えられる。線刻は溝の幅より2種に大別できる。1つは幅2mm以上の線刻で

あり、主に鋸歯状紋を施す際に使用される。いま1つは幅 2mm 未満の線刻であり、髭や肩甲骨の表現に用いられている。彩色は全身に施されており、後頭部と頸部は白色顔料、それ以外の箇所は主に赤色顔料で塗られている。

【姿勢】上腕は肩部から下がるが、両腕とも肘から先が欠損している。残存する関節部の角度からみて肘を曲げていたと考えられる。両足は一体化しているものの、膝を折った姿勢で、膝関節が彩色によって強調される。

【各部位】頭部には樹脂と泥を混ぜた膠着材で植物繊維が固定され、切り揃えることで頭髪が表現されている。また、隈取様の彩色が両眼の下部から両頬に伸びるようにはどこかされている。両頬には線刻と白の彩色によって髭が表現される。歯列を覗かせる口からは長舌が上方に伸長し、頭頂部を越えて後頭部に接合する。長舌と後頭部の接合箇所は同心円紋で囲われている。耳の上部には鋸歯状紋が施された装飾が付される。同様の文様は当資料の他の部位でも多用される。乳房は砲弾型を呈し、右乳房の周囲は連続する十字文で囲われている。乳房下で胴体から彫り分けられた胸郭が特徴的である。胸郭は、黒色帯と白色帯に交互に塗り分けられ、それぞれ二本を数える。白色帯は個々の肋骨で、黒色帯はその間隙と考えられる。また、白色帯には、赤と黒の斜行する細線が交互に引かれている。肋骨とともに、胸骨の一部である剣状突起と胸骨体が明瞭に表現されている。他にも、背面には背骨と肩甲骨の表現がそれぞれ認められる。



図1 慶應大が所蔵するマランガン彫像（資料1・ME-1521）

既婚女性が身に着けるパンダナス製被り物が頭部に表現されている。その頂部には、金属製加工具によって意図的に切断された痕跡があり、何らかの部材が付属していたと推定できる。慶應大所蔵資料には、その部材と思しき羽飾りを模した木製品がある（図2、第4章第1節に後述）⁸。胸部にはカプカプ⁹を模した意匠が、また腰部には腰巻と思われる意匠がそれぞれ認められる。台座には、上方にひらく複数の突起が付されている。台座全体で二枚貝が表現されている可能性もあるが、詳細は不明である。



図2 資料1のものと推定される部材

3.2. 資料2 (ME-10195) の形態的特徴

【加工・彩色】図3の資料2は彫像の前面に手斧や鑿による加工痕がほとんど確認できないことから、何らの道具によって磨かれたと推定できる。しかし、後頭部や背面、背面支柱には加工具による彫り出しの痕跡が明瞭に確認できる。肩から腕・胸部は黒、腹部以下が赤に塗り分けられている。資料2に使用される赤色顔料は資料1と比較してやや明るい。

【姿勢】肩から下がる腕は、肘より先が内側に向けて屈曲し、胴体の正面に配された動物意匠に掌が接続する。膝をやや曲げた姿勢をとり、胴体が長く、全体として細身である。彫像の顔に正対すると、腰部をやや左にねじったように見える。肩・胸部と腹部の境界が明瞭である。前頭部・頭頂部・後頭部、胴体正面に配された動物意匠、および後背支柱は彩色されておらず、制作途上の可能性がある。

【各部位】前頭部・後頭部と頭頂部のあいだには段が付けられている。頭頂部が一回り大きく、なおかつ彩色が施されていないことから、特定の髪型か被り物を表現する途上だったのかもしれない。頭頂部には幅2cm・高さ3cmの小型の突起が2つ、後頭部には幅5cm・高さ9cmの大型の突起が1つ、計3つの突起が頭部に表現される。頭頂部の2つの突起は先端が鋭角になるように調整される。対して、後頭部の突起は上部が折れて破損している。両眼の下には三日月状の図案が描かれている。顎部も一回り大きく、前方と左右に突き出る¹⁰。口唇の両端に、円形の断面をもつ何か折れた跡が残るが、昭和12年(1937)刊行の『ニューギニア土俗品圖集』に掲載された写真(第五十圖版)には、口唇左端から眉のあたりまで上方に伸びる細長い牙状の部材が確認できる。カプカプの意匠が胸部に描かれて

⁸ 戦前に刊行された南洋民族資料の集成目録の挿絵に資料1と思しき彫像の挿絵が掲載されている。その挿絵には羽根を模した木製の装飾品を頭頂部に付した状態の彫像が描かれている(丸芳・藤川1929)。

⁹ カプカプ(*kapkap*)とはメラネシア地域に分布する貝製装飾品である。シャコガイなどより作成された貝製円盤に幾何学紋様をあしらった亀甲版を装着したものであり、ニューアイルランド地域では一般に首飾りとして使用される。慶應大所蔵資料にも含まれる。

¹⁰ 同様の特徴はマランガン儀礼で制作・使用されるタヌア仮面に認められる。

いる。上述した資料1と異なり、朽ちた死体を思わせる肋骨表現や乳房などの性表現は認められない。

2体の動物が胴体正面に表現されている。上部には、四足動物が下向きに配置され、細長い尾の先端が彫像の上下歯列の間に入る。口唇が嘴状に表現されていることからカモノハシにも見えるが、管見の限り類例がなく不明である。四足動物の下には、それと向かい合うように上向きになった黒色の鳥が配されている。その形態から、スズメ目のオウチュウ(*Dicrurus macrocercus*)と推定できる。両腕の肘に噛みつくように、黒色の魚が表現されている。形状からサメを表現したものと考えられる。尾ヒレは彫像本体の足首下に接続する。胸ビレの一方は四足動物の嘴状口唇に啣えられ、他方は本体後背の支柱に接続する。これら動物意匠は本体にとっては支柱にもなっており、そのあいだに割り貫かれた空隙によって彫像全体の複雑性が資料1以上に増している。この特徴は、ニューアイルランド中部に限定されるウリ(*uli*)像に共通する。興味深いことに、彫像のあちこちに釘が打ちつけられており、特に四足動物に集中する¹¹。留め具としての機能は持たず、装飾目的で打ち付けられたと考えられる。なお台座はなく、足の下から杭が直接のびる。



図3 慶應大が所蔵するマランガン彫像 (資料2・ME-10195)

¹¹ 彫像本体と同様に、両眼に貝製の眼球が嵌入されており、他の動物意匠より重視されていたと推測できる。

4. 類例資料から想定できる慶應大資料の収集地域と収集時期

小嶺磯吉は1902年に独領ニューギニアに渡り、1934年10月3日に69歳で亡くなるまで、現在のココポ(Kokopo)にあった小嶺商会の代表として活動した人物である(Iwamoto 1999; 山口 2015)。当初は、独領ニューギニア総督のアルバート・ハール(A. Hahl)や、ドイツ資本の貿易商会ヘルンシェイム(Hernsheim Co.)の下請けとして、現地島民との直接交渉や武装解除、交易所開設などに従事していたが、1910年にはアドミラルティ諸島に1千ヘクタールの借地権を認められ、小嶺自身の交易所をマヌス島北海岸に開設した。南洋貿易や造船業を営むかわら、現地社会との関係を活かして小嶺は数多くの造形物を収集した。1911年には、シカゴのフィールド博物館から派遣されていたキュレーター、アルバート・ルイス(A. Lewis)に3千点余りの資料を売り渡している。

慶應大のマランガン彫像2体については、ルイス以前の1902～1911年に収集されたのか、ルイス以降の1911～1934年に入手されたものなのか、残念ながら記録が残っていない。また、ニューアイルランド島のどの地域に由来するのかもわからない¹²。しかし、特に2000年代以降、博物館や個人コレクターが所蔵するメラネシア民族資料の図録が相次いで出版されており、入手したものだけでも14冊を数える(表1)。また、博物館資料のデータベース整備とウェブ公開が進んだことによって、画像データ比較による類例検索が容易な状況にあり、マランガン彫像については、実見資料も含めてこれまでに276点の画像を収集した。その中には、慶應大のマランガン像2体の類例が含まれている。

4-1. 資料1の類例検索と収集地域の推定

資料1では特に(1)パンダナス製の帽子、(2)鋸歯紋の装飾を付した耳、(3)突き出る胸郭、(4)腰巻の4意匠に着目して類例資料検索した。その結果、小嶺がルイスに売却したフィールド博物館所蔵資料群の中に(1)～(4)の特徴をもつマランガン彫像が確認できた(図4)¹³。フィールド博物館のマランガン彫像には頭部に羽を模した装飾部材が配されている。すでに触れたように、これと類似する部材が慶應大の所蔵資料内にもある(図2)。慶應大所蔵資料が砲弾型の乳房をもつ女性像であるのに対して、フィールド博物館資料は男根を有する男性像だが、口唇から上方に伸び頭頂部を経て後頭部まで達する長舌、眼窩の下隈取り、胸に描かれたカブカブの意匠、一体化した両足、膝を折った姿勢など多くの共通点を確認できるだけでなく、彫像全体の構造も類似する。このことから、男性像と女性像が2体一組で収集された可能性があり、そうだとすると、慶應大の資料1の収集年代もルイス以前の1902～1911年ということになる。

¹² 1911年以降に現地に赴き、小嶺の事業を支えた鮫島三之助も独領ニューギニアで民族資料の収集活動に従事したことが知られる。彼のコレクションにはニューアイルランドで収集された民族資料が含まれている。それらはカヴィエン(Kavieng)村落(ニューアイルランド島北部)、キマダン(Kimadan?)村落・ナマタナイ(Namatani)村落(ニューアイルランド島中部)で収集されたことが記録されている(藤木 1939)。また、小嶺がルイスに売却した資料の内、ウリ像の1つはカテディン(Katedin)村落・ピニキンドゥ(Pinikindu)村落(ニューアイルランド島中部)の後背地域にて収集されたことが記録されている(Welsch 1998:438)。

¹³ 慶應大の山口徹氏が2014年に実施したフィールド博物館での資料調査によって確認された。本稿の画像データは山口氏から提供いただいた。

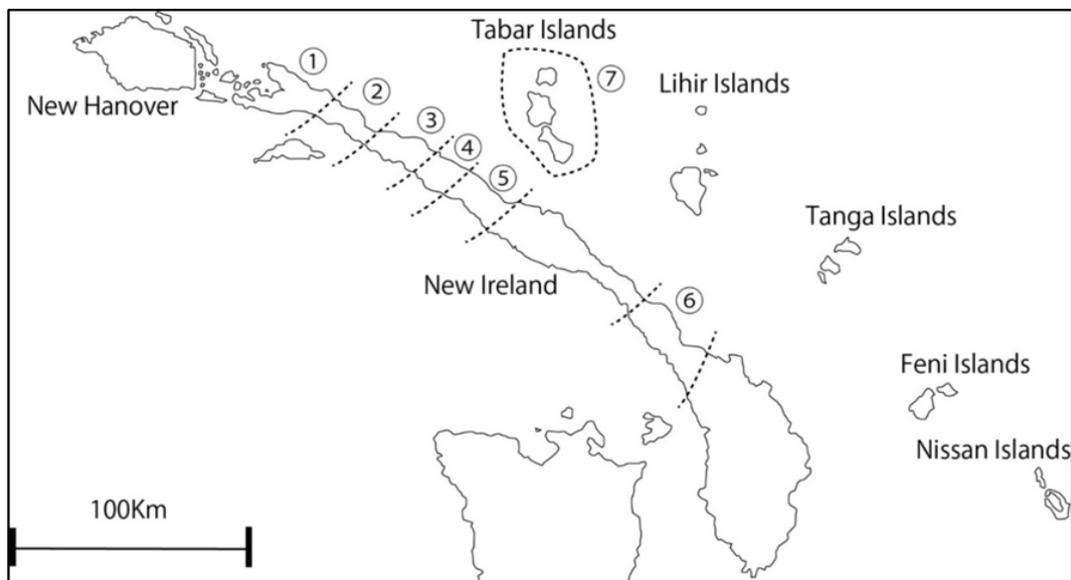
表1 近年出版されたメラネシア民族資料の図録一覧（筆者が入手できたものに限る）

No.	書誌情報	対象地域
1	Lincoln, L. 1987 <i>Assemblage of spirits: Idea and Image in New Ireland</i> . The Minneapolis Institute of Arts and George Braziller, New York.	ニューアイルランド
2	Waite, D. 1987 <i>Artefacts from the Solomon Islands in the Lulus L. Brenchley Collection</i> . The Trustees of the British Museum, London.	ソロモン諸島
3	Smidt, D. 1993 <i>Asmat Art: Woodcarvings of Southwest New Guinea</i> . Rijksmuseum voor Volkenkunde and George Braziller, New York.	ニューギニア
4	Wardwell, A. 1996 <i>Islands Ancestors: Oceanic Art From The Masco Collection</i> . North Carolina Museum of Art, Raleigh.	オセアニア全域
5	Gunn, M. 1997 <i>Ritual Arts of Oceania New Ireland in the Collections of the Barbier-Mueller Museum</i> . Musée Barbier-Mueller Museum, Geneva.	ニューアイルランド
6	Ohnemus, S. 1998 <i>An Ethnography of the Admiralty Islands: The Alfred Bühler Collection</i> , Museum der Kulturen, Basel. University of Hawai'i Press, Honolulu.	アドミラルティ諸島
7	Kaufmann, C. and C. Schmid. 2002 <i>admiralty islands art from the south seas</i> . Museum Rietberg Zurich, Zurich.	アドミラルティ諸島
8	Gunn, M. and P. Peltier. 2006 <i>New Ireland: Art of the South Pacific</i> . Musée du quai Branly, Paris.	ニューアイルランド
9	Waite, D. and K. Conru. 2008 <i>Solomon Islands Art: The Conru Collection</i> . Musumeci Spa, Quart, Italy.	ソロモン諸島
10	Burt, B. 2009 <i>Body Ornaments of Malaita, Solomon Islands</i> . University of Hawai'i Press, Honolulu.	ソロモン諸島
11	Craig, B. 2010 <i>Living Spirits with Fiwed Abodes</i> . University of Hawai'i Press, Honolulu.	ニューギニア
12	Howarth, C. 2011 <i>Varilaku: Pacific Arts from The Solomon Islands</i> . The National Gallery of Australia, Canberra.	ソロモン諸島
13	Burnt, P. 2012 <i>Art In Oceania: A New History</i> . Yale University Press, New Haven and London.	オセアニア全域
14	Hamson, M. 2013 <i>Collecting New Guinea Art: Douglas Newton, Harry Beran and Thomas Schultze-Westrumi</i> . Cassochrome, Waregem and Belgium.	ニューギニア

上記2例以外に(1)～(4)の特徴をもつマランガン彫像の収集地には、ニューアイルランド島北部のティガク(Tigak)地域(図5中の①)、カラ(Kara)地域(②)、中部のラマソン(Lamasong)地域(⑤)が認められた。収集数はそれぞれ、1点、2点、1点である。北部の資料の収集時期は独領ニューギニアの植民地経営が本格化した1880～1910年代だが、中部の資料は1920～1960年代のオーストラリア委任統治領期になってからのものである。それゆえ、1902～1911年収集と推定できる慶應大の資料1ならびにフィールド博物館蔵の類例は、ティガク地域(①)かカラ地域(②)に由来すると考えられる。



図4 シカゴ・フィールド博物館所蔵資料(左)と装飾を頭部に配した資料1の復元図(右)



①Tigak 地域 ②Kara 地域 ③Nalik 地域 ④Notsi 地域 ⑤Lamasong 地域 ⑥Patpater 地域 ⑦Tabar 諸島
図5 慶應大資料と同時期に彫像が収集されたことが判明している地域

4-2.資料2の類例検索と収集地域の推定

資料2については特に、(1)口元から伸びる牙、(2)脚部の前に位置する黒色の鳥、(3)両腕の下に対をなす黒色の魚に着目して類例資料を検索した。資料1と異なり、フィールド博物館の資料の中に類例はなかった。また、いずれか1つの特徴をもつ資料は多いが、全てを兼ね備える類例は他のコレクションにも確認できなかった。さらにニューアイルランド島沖合にあるターバル諸島(⑦)で収集された資料には、(1)～(3)のいずれの特徴も確認できていない。

しかし、口元から伸びる牙が表現され、黒色の魚が胴体の前に配されたマランガン彫像が天理参考館の所蔵資料のなかに見つかった(図6)¹⁴。黒色の魚の配置は、慶應大と天理参考館の資料で異なるが、赤い三角形が描かれた長い胸びれと橙色の線で表現された背びれは互いに酷似している。顔面の彩色や頭部の被り物など差異はあるが、肩から腕にかけて黒を基調に胴体・脚部と塗り分けられている点や、穴の開いた耳たぶが垂下する点は共通する。慶應大資料の口唇の両端には、円形の断面をもつ何かが折れた痕が残る。天理参考館資料と同様に、かつては牙状の部材があったことが分かっている。特に注目すべき共通点は、肩から腕・胸部は黒、腹部以下が赤に塗り分けられている点であり、管見の限りこれは資料2と天理参考館資料にのみ認められる彩色方法である。また、両資料には共通する特徴が複数認められるだけでなく、動物意匠で飾られた支柱と本体とのあいだに空隙が割り貫かれた全体構造も類似しており、2体は類例と判断してよい。天理参考館所蔵のマランガン彫像は、1911年以降に小嶺の右腕としてアドミラルティ諸島の農園事業を担っていた鮫島三之助が収集したものであり、ニューアイルランド南部パトパター(Patpater)地域(⑥)に位置するナマタナイ(Namatanai)村落収集との記録が残る。



図6 資料2側面(左)と天理大学附属天理参考館蔵資料(右)

¹⁴ 天理参考館の中尾徳仁氏と早坂文吉氏にご協力いただき、筆者が2015年度に実施した資料調査で確認できた。

5. まとめ―「収集」の歴史研究に向けて

慶應大所蔵の資料 1 (ME-1521) の類例は、米国シカゴのフィールド博物館所蔵資料のなかから見つかった。資料 2 (ME-10195) の類例は、天理参考館所蔵資料のなかに確認できた。3 館の資料はいずれも、小嶺磯吉あるいは小嶺商会の鮫島三之助によって収集された彫像であった。しかも、それぞれの類例は、個々の特徴や意匠を共有するだけでなく、彫像全体の構造にも強い類似性を認めることができる。このことから、慶應大所蔵資料 1 とフィールド博物館の類例資料、慶應大所蔵資料 2 と天理参考館の類例資料は、それぞれ同一の彫刻師によって制作され、同一のマランガン儀礼で用いられた後に、2 体一組で小嶺や鮫島に売り渡されたと推定できる。

クレーマーが 1908 年にハンバ村落で撮影したマランガン彫像 2 体は、いずれもテリングア (Teringa) という同一の彫刻師によって制作されたことが記載されている (Krämar 1925: 37)。この 2 体はサイズが異なるものの、全体の構造や意匠、彩色がきわめて類似した彫像である。また、1910～29 年にニューアイルランドに滞在したカトリック宣教師ピーケル (G. Peckel) 撮影の写真や、1931 年にナリク (Nalik) 地域メディナ (Medina) 村落のマランガン儀礼を写したスパイザー (F. Speiser) 撮影の写真では、酷似する彫像が複数体展示されている様子を確認できる (Gunn 1996:43)。これらは、慶應大所蔵の 2 体の彫像がそれぞれ、類例の彫像とともに同一の彫刻師によって同一の儀礼で用いられていたことを支持する情報である。

この推定が正しいとすれば、「収集」の歴史研究のために、少なくとも以下の 3 点の可能性を指摘できるだろう。第 1 に小嶺磯吉は、5 月末から 7 月初旬にかけて毎年マランガン儀礼が開催され、儀礼後に造形物が入手できることを把握していた可能性である。彼らが儀礼を熟知していたからこそ、儀礼後に破棄されてしまう彫像を一括収集できたと筆者は考える。

第 2 に、フィールド博物館のキュレーターだったアルバート・ルイスはマランガン彫像に関して、類例資料が複数ある場合には選別した上で小嶺から購入した可能性である。あるいは、小嶺自身が選別してルイスに販売したとも考えられる。

第 3 に、小嶺磯吉を主体とする収集活動は 1911 年ごろまでで、それ以降はアドミラルティ諸島の農園事業に加わった鮫島三之助が収集活動を代行した可能性である。慶應大資料 2 と天理参考館資料は、アドミラルティ諸島のマヌスとココボを往来するあいだにナマタナイ村落で鮫島が見出した資料であろう。ところで、鮫島が小嶺に譲った 1 体は先述したように、頭部や動物意匠の一部が彩色されておらず、また表面の磨きは全面には及んでおらず、特に頭部には彫り出しの痕跡が確認できることから、これは制作途上の彫像と考えてよい。頭部後方に何らかの部材が破損した痕跡があることから、これが制作中断の原因かもしれない。これに対して天理参考館の資料は完成した彫像で、欠損のない優品とみてよい。ここに、収集者としての鮫島自身の意図や目論見がうかがえる。おそらく、鮫島は優品を手元に残し、欠損のある彫像を小嶺に渡したのだろう。ただし、小嶺商会と完全に無関係な収集活動ではなく、少なくとも鮫島は造形物収集の指南を小嶺から受けていた

と考えられる¹⁵。

オセアニアの造形物収集については、「コレクティング・コロニアリズム (collecting colonialism)」といったテーマで、現地収集者の活動に光をあてた歴史研究論集が 2000 年代に入って相次いで出版されている (e.g. O'Hanlon & Welsch 2000; Gosden & Knowles 2001; Cochrane & Quanchi 2007)。その中には、リチャード・パーキンソンばかりでなく、19 世紀末からビスマルク諸島民を農園に斡旋していたトーマス・ファレル (T. Farrell)、独領ニューギニア総督のアルバート・ハール、ニューアイルランドのカヴィエン支庁を取り仕切った行政官フランツ・ボルミンスキー (F. Bolminski)、現地便船スマトラ号の船長だったカール・ナウアー (K. Nauer) らが含まれている。ほぼ同時期に独領ニューギニアで収集活動を行っていた小嶺磯吉やその後継者といえる鮫島三之助を彼らと比較しながら、「コレクティング・コロニアリズム」研究の中に位置づけることが今後の課題である。

【謝辞】

研究を進めるにあたり、天理大学付属天理参考館学芸員の中尾徳仁氏、早坂文吉氏には天理参考館が所蔵する資料を実見する機会を設けて頂きました。また本稿を執筆するにあたり、指導教員の山口徹先生 (慶應義塾大学) にはご指導ご鞭撻を賜りました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

【参考文献】

南の會同人

1937 『ニューギニア土俗品圖集: 上巻』 南洋興発株式会社

1940 『ニューギニア土俗品圖集: 下巻』 南洋興発株式会社

藤木喜久麿

1939 『図壽里庫叢書三編: ニューギニア其附近島嶼の土俗品』 吾八

丸芳葆・藤川政次郎

1929 『ニューギニアパプア族作品集』 丸藤屋出版部

山口徹

2015 「ウリ像をめぐる絡み合いの歴史人類学-ビスマルク群島ニューアイルランド等の造形物に関する予察」『史學』第 85 巻、pp.401-439

Gosden, C. & C. Knowles.

2001 *Collecting Colonialism: Material Culture and Colonial Change*. Berg, Oxford and New

¹⁵ 資料調査の結果、天理参考館には鮫島がナマトナイ村落で収集したとされるマランガン彫像が 5 体収蔵されていることが判明した。小嶺は 1902 年以降、ドイツ総督ハールによるニューアイルランド平定事業に参加し、特にナマトナイ村落に行政支庁を建設するためにナマトナイ村落周辺やニューアイルランド島中部の踏査をいち早く行っている。小嶺は早期から現地島民と直接交渉に臨んでいたことから良好な関係を構築することができ、貴重な民族資料を収集することができたと山口が指摘している (山口 2015)。1911 年以降に小嶺商会の事業を支えた鮫島は、資料収集の指南を受けただけでなく、小嶺の活動基盤も引き継いだ可能性が指摘される。

York.

Groves, W. C.

1933 Report on Field Work in New Ireland. *Oceania* 3(3): 325-361

Gunn, M.

1992 *Malagan Ritual Art on Tabar. New Ireland, Papua New Guinea*. PhD Thesis, Anthropology: Dunedin, New Zealand: University of Otago.

1996 *Ritual Arts of Oceania New Ireland in the collections of the Barbier-Mueller Museum*. Musée Barbier Mueller, Geneva.

Iwamoto, H.

1999 *Nanshin: Japanese Settlers in Papua and New Guinea, 1980-1949. The Journal of Pacific History*, Canberra.

Krämer, A.

1925 *Die Malanggan von Tombara*. Munich: George Muiler.

Küchler, S.

1992 Making skins: Malangan and the idiom of kinship in Northern New Ireland. In J. Coote and A. Shelton (eds.), *Anthropology Art and Aesthetics*, pp.94-112, Clarendon

2002 *Malanggan: Art, Memory and Sacrifice*. Oxford, New York.

Lomas, P.

1979 Malangans and Manipulators: Land and Politics in Northern New Ireland. *Oceania* 50(1): 53-66

O'Hanlon, M. & R. Welsch

2000 *Hunting the gatherers: Ethnographic Collectors, Agents and Agency in Melanesia, 1870s-1930s*. Berghahn Books, New York and Oxford.

Parkinson, R.

1999 *Thirty Years in the South Seas. Land and People. Customs and Traditions in the Bismarck Archipelago and on the German Solomon Islands*. Edited by Dr. B. Ankermann. translated by John Dennison. Translation edited by, Peler White. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Powdermaker, H.

1933 *Life in Lesu*. Williams & Norgate, London.

Quanchi, M. & S. Cochrane.

2007 *Hunting the Collectors: Pacific Collectios in Australian Museum, Art Galleries and Archives*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle.

Welsch, R. L.

1998 *An American Anthropologist in Melanesia: A.B. Lewis and the Joseph N. Field South Pacific Expedition 1909-1913, Volume 1: Field Diaries*. University of Hawaii Press, Honolulu.